

熊本県立第二高等学校 令和7年度（2025年度）学校評価表

1 学校教育目標
<p><b>「すべての学びに感動・感謝を！」</b></p> <p>建学の精神である「自主積極」「廉恥自尊」「礼節協調」のもと、熊本市にある普通科、理数科、県内唯一の美術科を有する高校として、生徒それぞれが高い目標をもち、進路実現に向けて学ぶ姿勢を貫く力を育む。また、新たな社会Society5.0で活躍できる語学運用能力やICT活用能力を有した、熊本地震からの創造的復興を主導するグローバルリーダーを育成する。</p>

2 本年度の重点目標
<p>(1) 組織力の向上</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・連携と情報の共有化を図る。</li> <li>・現状の課題を的確に捉え、ベクトルをそろえ、確実に改善する。</li> <li>・自己研鑽、校内研修等の充実により、教育の質の向上を目指す。</li> </ul> <p>(2) 指導力の向上</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・実践的な担任力</li> <li>・教科指導力の向上</li> <li>・思考させる生活指導の実践</li> </ul> <p>(3) 進路指導の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒が未来への夢を抱き、志を高く掲げて、目標を達成させる進路指導</li> <li>・現在の大学入試制度の的確な対応</li> <li>・3年間を見通した俯瞰的進路指導システムの構築と実践</li> </ul>

3 自己評価総括表						
評価項目		評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
大項目	小項目					
学 校 経 営	特色ある学校づくり	自ら学ぶ態度の育成	「進路指導年間計画」に沿って、各学年で段階的に主体的に学ぶ姿勢と自学自習の習慣を定着させ、学力伸張の基礎を固める。	「進路年間計画」に沿った各学年の進路目標と指導を明確にする。また、定期的な面談により継続的な生徒情報の収集と進路意識の向上を働きかける。 教員個々の日々の教材研究をはじめ、大学入試問題研究・分析を行い、教師が高い教科指導力を身に付けることで、「授業第一主義」の推進を図る。	B	「進路年間計画」に基づいて、模擬試験、二高塾、進路講演会等のキャリア教育を実施した。また、各学年が定期的に学年集会を実施し、指導方針の共有を行った。二高塾は多くの生徒が参加しているが、生徒個々の受験に対応した適切な教材や指導方法など課題がある。 令和5年から始まった大学入試問題研究であるが、今年度は各教科からの結果分析に時間を割き、難関大の入試傾向の情報の共有、ひいては定期考査における作問に活かされている。
		読書習慣の定着	生徒の朝読書習慣定着率90%以上を目指し、読書の幅の広がりを図りながら自己変容の質的の向上を目指す。	年間を通して「朝読書」を継続する。読書週間の取り組みを活性化させ、積極的に読書に取り組む生徒の育成を図る。		B

	SSHの推進	SSH先導的改革Ⅱ期申請に向けてSTEAM-D（科学哲学・科学倫理を含む）のカリキュラムを開発する。また、熊本サイエンスコンソーシアム（KSC）の取組の更なる充実を図り、SSH校としての先導的な役割を果たす。	STEAM-D（科学哲学・科学倫理含む）のカリキュラムを開発し、効果を検証するとともに他校への発信を積極的に行う。また、KSCと産学官との連携を強化し、マクルールブリック作成・活用等を通じて科学技術人材育成を図る。	A	理数・美術・普通科の枠組みによる「STEAM-D」を深化させ、「科学本質」等の科目においてマクネマー検定を用いた客観的な効果検証に成功した。また、KSCの連携先が約80社（情産協）へ拡大し、崇城大学「探究活動プログレス入試」等を通じた高大接続の出口戦略も確立された。今後は、これらのノウハウを「二高ICEモデル」と共にパッケージ化して九州全域へ普及させたい。
	学校生活・学校行事の充実度	二高生らしく、生徒一人一人が主体的かつ積極的な行動ができるよう促し、一体感や感動を体験させ、学校生活の充実を図る。	例年通りとなりがちな学校行事を様々な側面から見直し、計画実施する。行事による心の成長につなげ生きる力につなげる。	A	運動会では、生徒会を中心に計画運営し、各団長のリーダーシップのもと、生徒同士が協力しながら精一杯取り組み、完全燃焼することができた。文化祭では、緻密に計画することで例年より余裕のある取組になった。全校合唱やクラスの取組をとおして成長するきっかけとなった。
開かれた学校づくり	情報の公開・発信	公式サイト及び育竜会広報誌（二高會報）について内容の更なる充実を図り、生徒・保護者・卒業生・地域、そして県民の方々へ積極的な情報発信を行う。	各学年、各分掌、部活動などサイトの更新頻度を高め、情報をタイムリーに発信していく。 育竜会広報委員会との連絡を密にし、保護者の目線による本校の良さを幅広く、的確に伝えることができるよう、内容の更なる充実を目指していく。	A	第二高校のホームページでは、部活動や学校行事、各科・各分掌の取り組みなど、活発な情報発信が行われた。 育竜会広報誌についても年間3回の発行を実現し、育竜会広報委員による行事での写真撮影や生徒への取材活動を通じて、非常に充実した内容となった。
	保護者・地域等との連携	学年保護者会等を企画・実施するとともに、学校行事を近隣小中学校や地域に公開し、本校の教育活動への理解促進を図る。 二高会報の内容について更なる充実（視覚化等）を図り、地域等へ積極的な情報発信を行い、連携強化につなげる。	ホームページやclassi等による情報伝達を迅速・着実に行い、保護者への周知徹底を図る。 また、地域の本校へのさらなる理解促進を図るため、ホームページに行事予定や学校生活の様子を掲載するとともに、二高生の活躍の場面を様々な媒体を使い積極的に発信する。	A	各学年・各部署の職員がホームページやClassiを活用し、丁寧な情報発信に努めたことで、保護者への周知徹底を図ることができた。特にホームページにおいては、積極的な更新を通じて本校の活動を広く学外へアピールすることに繋がった。
安全管理の取組	健康教育の推進	保健・相談部を中心に、全校生徒へ感染症等予防の呼びかけを行うと同時に、個別のケアも行う。全職員で校内の安全点検を行い危険箇所の改善を図る。	職員が連携して授業のみならず、校内巡回を行い、生徒の様子を観察する。また、支援・配慮を必要とする生徒については、特に職員間で共通理解を図る。校	A	健康診断の日程設定と監督者不足等に課題が残った。救急救命法の時期の検討が健必要であろう。感染症防止の観点から講演会についてはオンラインで実施する等の対応もしている。今後も引き続き、生徒・職員の感染症予防対策は徹底に向けて工夫努力をしていきたい。

				内安全点検では、記録表を活用し、年度内3回の点検実施と改善を行う。		
	施設設備の保守・点検		安全点検結果や普段の見回りをもとに、危険箇所の改修を行い安全安心な環境づくりに努める。	日頃から校内を巡回し施設・設備を点検するとともに、保健・相談部と連携して危険箇所の情報を正確に把握し、優先順位を決めて学校予算で対応できるものは、速やかに改修する。大規模改修については、今後の教育活動を見据え県に予算要求して改善を図る	B	保健・相談部と連携して、危険・破損個所の確認、修繕を行い予算が伴う箇所については県へ要望し修理等を行った。昨年に引き続き、普通教室棟トイレ改修は、2列完了した。残り1列については、引き続き予算要求を行っていく。特別教室棟トイレ改修及び教室及び特別教室のLED化について職員・生徒の協力もあり工事が完了し教育環境を改善することができた。引き続き老朽化した普通・特別教室棟等の校舎改築に向けて、県へ要望をしていく。
	業務改善・働き方改革	業務改善及び働き方改革の推進	<p>運営委員会の活用による見通しを持った学校運営を図る。</p> <p>分掌部の改編並びに班長制による実効をあげる。</p> <p>休校等の臨時措置に対応できる体制を堅固にする。</p> <p>学校行事の見直しを推進する。</p> <p>日課表の検討を進め、業務配分を適正な形で示す。</p> <p>定例の衛生委員会を職員の健康確認につなげる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・業務の見直しと連動し効率化を図る。</li> <li>・学校行事をはじめとする各取組のあり方を見直す。</li> <li>・朝の時間をゆとりにつなげる。</li> <li>・ICT機器を活用した業務の効率化をさらに推進する。</li> <li>・日課表の見直しによる勤務時間内の業務処理を促進。</li> <li>・衛生委員会等の議論の結果を積極的に職員に周知する。</li> </ul>	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・業務改善や働き方改革等に関する意見交換を運営委員会で継続的に行うことができたが、更なる改善を図る必要がある。</li> <li>・朝の時間についてICTの活用促進と日課表の改善は継続して行う。</li> <li>・働き方改革について、時差出勤導入や衛生委員会記録の回覧等を活用することで、個人の意識改革は進んでいる。一方で、業務の偏りは残っている状況であり、各校務分掌においてチーム感をもって業務改善を進めていく。</li> <li>・学校行事等について、開催後のアンケート等を活用し、次年度を見据えた振り返りを行う体制作りができた。</li> <li>・学校保護者間連絡システムを活用し、休校等の臨時措置を円滑に行うことができた。</li> </ul>
学力向上	学習環境の充実	ICT整備による学習環境の充実	学習の個別最適化を目指して、各教科等の特性を生かしながら学習コンテンツの充実及び1人1台端末の環境整備を行う。	授業だけでなく家庭学習でも1人1台端末を活用した学びを展開するため、動画や課題の配信、授業資料の提示法などを模索するとともに1人1台端末のメンテナンスや故障対応を迅速に行う。	A	<p>GoogleClassroom等を活用し、動画・課題配信および授業資料のデジタル提示を積極的に行った。これにより、家庭学習における予習・復習の効率化を実現した。また、Gemini等の生成AIが急速に普及する中で、教育現場での活用を模索する必要性が大きくなった。本校では学びの充実という一貫した目標のもと、教員の授業設計支援における生成AI活用の可能性を模索している。</p> <p>データ活用やシステムへの依存度が高まる中で、端末トラブル等に対応する校内対応も迅速に行なうことができた。今後の課題は、生徒のAI活用や学習端末の保守管理について県の動向を把握しながら、個別最適化の実現に向けた取組を加速することである。</p>

	授業力の向上	研究授業の実施	観点別学習状況評価の研究と授業改善を軸に、相互研鑽授業と研究授業の推進を進め、授業改善と評価研究に活かす。	年2回の相互研鑽授業を実施し、育成したい資質・能力を意識した授業改善を図る。SSH先導改革Ⅱ期申請と連動させ、ICE評価モデルを活用しながら、育成したい資質・能力を焦点化させた研究授業を行う。	A	「二高ICEモデル」と「9つの力」を反映した指導案作成において生成AIを活用し、研究授業シートによる教科間での事例共有を実践した。年2回の研鑽期間で、ICE評価モデルに基づく観点別評価の具体化と、目標・活動・評価の整合性が取れた授業デザインを実現するとともに、教員の業務効率化を達成した。年2回の期間限定では教員によって多忙期と重なり負担が集中するため、次年度は通年実施に移行し、各自のタイミングで柔軟に研究授業を行える体制を構築する。これにより業務平準化を図りつつ、継続的な授業改善と評価研究を深化させる。
		授業評価の活用	主体的かつ協働的活動を取り入れた授業展開やICTの活用等、授業形態が変化している現状を踏まえ、実態に即した評価を行い、授業改善及び生徒への学習支援につなげる。	学習指導要領やSSHの取組を踏まえて授業評価項目を見直す。 アンケート結果を数値化し全職員で共有することで、授業改善や評価改善、学習環境の整備に生かせるようにする。	A	授業形態の変化を踏まえた評価改善の先行事例として、GR/AS/SSなどの探究活動の評価に着手した。評価項目を精選して教員負担を軽減するとともに、テキストマイニングやマクネマー検定を活用してアンケート記述を分析し、学びの変容を統計的に可視化した。これにより、生徒への迅速なフィードバックを実現した。探究活動で確立した統計的評価手法を通常授業にも拡大し、形成的評価の充実を図る。また、評価結果を個別最適化や学習支援により具体的に活用する仕組みを構築する。
キャリア教育（進路指導）	進路目標の実現	進路実現に繋がるキャリア教育の展開	進路講演会や職業別進路ガイダンス及びインターンシップを実施して生徒の進路意識の醸成を図る。 オープンキャンパス等を通して大学や入試情報を収集できる環境を整備し、情報の発信及び共有を行う。	同窓会と連携しながら1年生を対象としたインターンシップと職業別進路ガイダンスを実施する。 分離選択前の2年生を対象に大学・学部・学科説明会を実施する。 大学情報の収集と進路意識の啓発のため、夏休みを利用したオープンキャンパスへの参加を推奨する。	A	本年度も同窓会と連携したインターンシップと職業別進路ガイダンスを実施した。インターンシップには108人が参加し、職業別進路ガイダンスとともに職業観の育成の他、現役生と同窓生の交流の場となった。 2年生の大学・学部・学科説明会では9大学13講座を開設し、3年次の文理選択の参考となる情報を提供することができた。 各学年、各担任の呼びかけもあって例年多くの生徒が夏休みを利用して各大学のオープンキャンパスに参加した。次年度以降は、その情報をクラス等で共有する場を設けたい。 東京大学視察研修に1年生7人が参加し、大きな刺激を受けることができた。難関大希望者の裾野を広げるために、次年度は九州大学のオープンキャンパスへ学校単位での参加を計画したい。

		個に応じた進路指導の推進	<p>生徒との対話を大事にしながら、多様な生徒の多様な進路希望の達成を最優先する。</p> <p>学年に応じて自己の進路を考える機会を充実させ、生徒の進路意識及び学習意欲の向上を目指す。</p>	<p>個人面談を中心に巡回面談、三者面談を実施し、生徒や保護者の思いに沿った進路指導に全職員で取り組む。</p> <p>生徒個々の学力や志望に応じた二高塾（課外）を実施し、より効果的かつ実践的な学習指導の実践を図る。</p> <p>模擬試験の事前・事後指導をはじめ、業者による結果分析を定期的に行い、生徒の学力の現状を把握し、学習指導に活かす。</p>	B	<p>定期的な個人面談、三者面談を実施し、生徒や保護者の進路に対する思いを理解することができた。昨年まで実施していた巡回面談は職員の負担が大きいため、今年度は中止した。代わりに2学年では、学力層別の集会を定期的に行い、学習指導及び進路指導に対する意識付けを行った。</p> <p>学力と志望に応じた二高塾は、1,2年生の出席が良好だったのに対し、3年では欠席が目立った。教科間の指導方針の差もあり、様々な点での職員間の目線合わせ、共通理解が必要であると考えている。</p> <p>模試の結果分析を進路指導部で実施しているが、学習指導に反映されているか検証が必要である。</p>
	進路情報の発信	進路に関する適切な情報の提供	<p>学期毎の「進路だより」の発行、年1回の「進路のてびき」の発行により、本校の指導方針の理解や進路情報の提供を行う。</p> <p>進路資料室や掲示板の積極的な活用を促すことで、生徒の進路意識の啓発を図る。</p>	<p>7, 12, 3月の各学期の終わりに、大学入試情報と職員のメッセージを掲載した「進路だより」を発行する。</p> <p>「進路のてびき」を活用した学習は、LHRを利用しているが、内容が多いので各学年の対応した指導案で実施する。</p> <p>学年進路部から各学年へ入試情報や模試の分析結果など定期的な進路情報の提供、及び指導方針や具体的な指導についての共有を行う。</p>	A	<p>各学期の終業式に合わせて「進路だより」を発行することができた。短時間ではあるが、終業式後に生徒が熟読する時間を設けている。</p> <p>「進路のてびき」を活用した進路学習は、各学年に応じた指導案を作成し実施したが、担任間の指導の差があるので、事前学習を徹底させた。</p> <p>学年進路部から定期的な情報発信や指導方針の共有を学年会で実施した。効果の検証はできていないが、情報発信による職員の進路意識の啓発ができたのではないかと思っている。現在の熊本県の学力状況を鑑みても、今後は広い視野（県外の進学校など）での本校の学力的な位置を発信する必要があると考える。</p>
生徒指導	交通指導の取組	交通指導の強化と交通マナーの向上	<p>交通安全は命に関わることとしての認識を持たせ、交通事故防止に主体的に取り組むことができるようにする。また、交通社会を形成する一員としての認識を持たせ、交通マナー・モラルに対する意識を高め、事故・交通違反の減少につなげる。</p>	<p>自転車のヘルメットの条件化を今年度から取り入れ、安全意識に関する啓発をおこなった。また、単車通学生に対して定期的な集会を開き、保護者との連携を持ちながら事故防止の意識向上につとめた。依然として交通マナーに関する苦情の電話があるが、その都度生徒に話しあうべき姿を伝えている。</p>	B	<p>一昨年度、交通事故が多かったため、昨年度の交通事項防止に重点的に取り組んだ結果、交通事故は減少した。今年度も引き続き安全意識の向上に取り組み、交通事故は昨年度と同程度であった。ヘルメット着用率向上のために登校指導をおこなったり、必要性を度々生徒に伝えたりした。何のためにかぶるのかを考えさせ、生徒が必要性を認識した上で着用するよう呼びかけることにより着用率の向上率につながった。今後も続けていきたい。</p> <p>交通マナーについては、課題が残っている。生徒の心の育成を継続的に続けておこなっていく。</p>

	服装指導の取組	生徒の服装における自己管理能力の向上	生徒の自律を促す日常的な指導や声かけを継続し二高生として品位ある身だしなみができるようにする。ダメなものはダメとしっかりと指導することを全職員で共通理解を図り取り組む。	服装についての校則見直しを毎年行いながら時代に即したものに変わっていく。安易な変更ではなく校則の意義も生徒に意識させながら日頃の着こなしを改善につなげていく。	B	今年度から全学年新制服となった。基本的にはきちんとした着用ができています。しかし、一部の生徒がネクタイを外したり、スカートを折り曲げたりしている現状がある。また例年、3年生が受験に向かう段階で服装が乱れてくる。最後まで校則を守りながら受験にも向かうような心を育てていく必要がある。
人権教育の推進	人権・道徳教育の取組	教職員・生徒の人権意識の向上	各学年2・3回のLHRでの活動だけでなく、全ての教育活動の中で、生徒の人権意識の向上を図る。 教職員は、LHRの事前研修や人権問題についての校内研修及び校外研修等を通して人権意識の向上を図る。	・LHR活動は委員長が作成した案を人権教育委員会で検討し、管理職に了解を得た上で職員の事前研修を行い、共通理解を図ったうえで実施する。 ・教職員はオンライン等の校内研修を踏まえ、全職員が研修成果報告を提出する。校外研修会にも積極的に参加し、研修内容を他の教職員と共有する。	B	・人権LHRでは本県とも関わりの深い、水俣病問題、ハンセン病問題を1・2年生対象に毎年交互に取り扱うこととしている。今年度は水俣病問題について、外部講師にご講演いただき、歴史的経緯、患者やその家族が置かれた実態について理解を深めた。また、10月に本校生が実行委員を務めた熊本県人権子ども集会を題材に、3学期のLHRで身近な差別について学習予定。3年生は「言わない・書かない・提出しない」取組について学習し就職及び進学差別を許さない態度を身に付けた。 ・職員研修では、部落問題を扱い、県で作成された資料を全職員で読み、フォームズで回答する形で実施した。第3次とりまとめについては、主幹から他の人権課題と絡め、講義をしていただいた。その他、人権教育委員会を開催し、LHRの実施や外部研修の内容、参加、職員研修に寄せられた感想について協議した。初任者研修等でも時間をかけて様々な人権課題について協議した。
	特別支援教育活動の推進	不登校傾向の生徒をはじめとした生徒への支援活動	早期対応及び適切な対応ができるように各学年会において生徒情報の集約を行う。個に応じた支援計画や指導計画を行う。	・週1回、教育相談部会を開催し、各学年の生徒状況を確認、また保健室の利用状況やSCへのつなぎなどを関係学年や担任と連携しながら早期対応や早期個別支援体制を作る。 ・ケース会議、特別支援教育対策委員会を状況に応じて開催する。	B	・各学年の生徒情報をもとに、早期対応や予防のために迅速にケース会議やSCへ繋ぐケースが増えた。 ・ケース会議には、管理職や保護者にも参加して頂き、連携して生徒の支援にあたることができた。
	命を大切にする心を育む指導	自他の生命を尊重する心の涵養	「健全な自尊感情を育む」、「規範意識を育む」、「人間関係を築く力を育む」を目標に取り組み	授業、ホームルーム活動、特別活動、総合的な学習の時間等すべての教育活動において、三つの目標	B	授業のみならず、休み時間も含めて全ての関わりの中で心の育成を伝えている。この日常的で継続的な取組が生徒の規範意識の向上につながり、自他共に命を大切にする心の育成につながっ

			を通して、自他の命の尊さを理解し、大切にする態度や行動が身につくようにする。	を明確に位置づけ道徳的実践活動を効果的に推進していく。		ている。
いじめの防止等	いじめの実態把握	いじめ早期発見の取組及び相談体制の確立	いじめの早期発見・実態把握に努めるとともに、生徒・保護者が相談できる環境づくりを行う。	毎日の生徒とのコミュニケーションを大切にしながら、職員間の情報共有を行い早期の対応に努める。	A	二者面談や職員間の情報共有により生徒の変化やサインをいち早く捉え対応することができるようにしている。またスクールカウンセラーの活用により早期の対応につながっている。
	指導体制の整備	いじめに対する措置	いじめが発覚した場合は、組織をあげて速やかに対応し、問題解決にあたる。	いじめが発覚した場合は、担任を中心に連携と共有を図り、いじめ問題対策委員会で速やかに対応する。その際、個人情報扱いに留意し保護者とも連携し、被害生徒の安全と安心を最優先にした姿勢で取り組む。	A	いじめが発覚した場合は、迅速に聞き取りを行っている。また、被害者を守ることを第一に考えながら組織で対応している。生徒間の仲違いが原因でいじめに発展することも多くあり、状況により立場が逆転するケースもあるため、聞き取りにも慎重に対応している。生徒が少しでも安心して学校生活を送れるように今後も対応していく。
地域連携(コミュニティ・スクールなど)	コミュニティ・スクールの活性化	学校運営協議会の開催	総合型学校運営協議会として、地域の行政機関や保護者、地域住民等との連携を深め、学校の魅力化を推進する。	学校運営協議会を年2回開催し、教育課程の編成や学校経営計画、防災体制の充実など、学校運営全般について改善のための協議を行う。	A	学校運営協議会を、2回(6月と2月)開催することができた。また、地域との連携を深めることができた。委員の方々からの、本校に対しての貴重な御助言等を職員間で共有して今後の学校運営に取り入れたい。
	地域との連携	校区防災連絡会との連携	東区役所や校区自治協議会との連携を深め、東町校区地域の防災体制を推進する。	東町地域の防災訓練に参加し、避難所運営マニュアルの確認を行うとともに防災体制の改善を行う。	A	市役所(東区役所)の防災担当職員と連携して、校内に備蓄している防災備品の点検を実施した。11月に、熊本市一斉防災訓練を本校にて区役所、東町校区自治協議会と合同で行い、本校に避難する模擬訓練も実施することができた。
理数科・美術科の充実	理数科の充実	科学的に探究する能力と創造力の育成	SSH第V期(3年終了)の中心的存在として、イノベーション人材に必要な能力を育成する。 課題研究を活用した進路実現に向けて、理数科を対象とした進路検討会を実施する。 高度な専門性と独創性・創造性を身につけた人材を育成する。	・哲学や倫理の思考を取り入れた本校独自のSTEAM教育を開発・実践する。 ・課題研究の内容について、進路希望との関連を意識させながら実践的な取り組みとなるよう指導する。併せて、生徒の進路希望を関係職員で共有するための検討会を実施する。 ・大学と連携した課題研究や大学の研究室や企業への訪問を実施する。	B	・あらかじめ計画した授業、課題研究、対外的な発表等については予定通り実施し理数科の取組として成果を上げることができた。 ・課題研究について、全国及び地域ブロックレベルの発表会に参加することができたが、その成果を生徒の進路実現につなげるためには、今後さらなる研究の深化が必要である。また、取組の成果を日常の学習習慣の確立や学力向上につなげるために、関係職員の意識の共有を図りつつ全体の制度設計を漸次見直していく必要がある。 ・大学や企業との連携については、授業時間の確保とのバランスを取りながら今後も積極的に進めていく。
	美術科の	美術を愛好	各専門科目を横断	3カ年シラバスの		・各単元で個別、協働、一斉学習を

<p>充実</p>	<p>する精神とキャリアにつながる実技力の向上</p>	<p>し多様な知識と実技力を育成する。 美術系進路への意欲を高め早期の志望決定と計画的な対策を行う。 美術を通した社会性と自己有用感の涵養を図る。</p>	<p>見直しにより学習効果を高め、個別指導を深化するとともに、年次に応じた進路情報や対策を示し、面談等による志望決定と実践的な準備を促す。また、外部との連携による講話や作品発表の機会等を設け、協働的・実感的な学びを推進する。</p>	<p>B</p>	<p>効果的に組み合わせることで複数教師で授業展開し、生徒の主体性や専門性を高めることができた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・美術科生徒情報交換会で課題等を共有し、三者面談で具体策を提示したほか、進路ガイダンスや美術系大学進路対策研究会等で進路意識の高揚を図った。進路選択の幅を保つため、実技だけでなく学科面での意欲喚起が必要である。</li> <li>・外部講師講演会や美術館ボランティア、健軍商店街との連携のほか、公募展等でのべ149名が入賞入選を果たした。</li> </ul>
-----------	-----------------------------	---	--	----------	--